

たけ はら たか お  
竹 原 崇 雄

学位の種類 文学博士  
学位記番号 文第67号  
学位授与年月日 平成3年11月7日  
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 宇津保物語の成立と構造

論文審査委員 (主査)

教授 菊田茂男 教授 鈴木則郎  
助教授 仁平道明

## 論文内容の要旨

『宇津保物語』は『源氏物語』成立前における物語の中ではもっとも長篇のものである。文学史の流れの上においても、『竹取物語』を承け、『源氏物語』へと繋ぐ位置にあり、古代物語の世界を考察する場合における重要な資料とすることができる。また物語の世界そのものも、完成されたものではないが、それだけに発展の可能性を秘めたものとしての魅力をもっている。

このような重要な位置を占めながら、『源氏物語』に比して研究が遅れをとってきたのは、江戸の学者細井貞雄が「みたれしふみ」と指摘していたように巻序の混乱や、本文中に見られる重複・錯簡が読解を阻み、読者の興味を削いだところにも原因の一つはあったものと思われる。したがって、この物語の近世における研究は、重複文の解明や、錯簡の補訂に始まったといつてよからう。現代における研究も、以上の問題点を含めた成立問題が主流をなしていたが、近時次第に研究の方向が物語の世界を構成する本質部分に向けられて来た。

本書『宇津保物語の成立と構造』は、これまでのこの物語の研究の核となってきた成立過程論を第一部とし、第二部を構造論として組み立てたものである。成立論と構造論は密接に結びついている。物語世界を模索し一步一步構築していく地道な営みの中に成立上の矛盾が生じ、それを克服し

物語世界の輪郭が整ってくるにつれて構造化された世界に作者の物語に託する理念が定位されていくのである。構造の分析は成立の分析へと逆行せざるを得ない。本質的に両者は目的を一つにするものなのである。(序章)

## 二

第一部の第一章・第二章では起筆の巻である「藤原の君」をとりあげた。第一章での巻末部分についての考察では、この部分に認められる矛盾記事が、書誌的事情によるものか、成立の過程において生じたものであるか明確には論証されていなかった。その矛盾の一つは秋から夏へと季節が逆行しているということである。物語中において、記事の配列は季節の推移に従って記されているのが原則である。以上の部分とは別に、内容的に矛盾する部分がある。この内容的に矛盾する部分と季節の逆行という矛盾記事を含む部分とを関連づけて考察すると、両者は本来一連の物語を構成する部分であったものが、分断されて、現在のような形態となり、矛盾を来すようになったことが理解できる。しかも、この巻末部分は本来は巻末を構成するのではなく、本来の巻末部分は七夕の行事を中心とする記事であり、現在の巻末部分は六月の「つごもり」を描いたもので七夕の記事よりも前に位置しなければならぬこととなる。このような成立の過程をとらねばならなかったのは、求婚物語の中に異質な登場人物を導入しようと意図した作者の構想によるものと思われる。これは、初期物語が一貫した構想に基づく整然とした形態を伴っているのではなく、削除・添加等の曲折を経て成立していったことを示している。

第二章では成立の問題を絵解との関係でとらえてみた。絵解とは絵詞とも呼ばれ、本文の流れに沿った形で本文中に挿入された文である。これについては、絵の解説・指示等の説があるが、本章においては本文の成立との関係の中で考える。

絵解は本文の表現順序に従って記されているのが普通であるが、この巻の絵解の一部には、その順序が乱れている。このような形態となったのは、作者の構想の変更に伴う記事の後記挿入に因るものと考えられる。また、冒頭の人物紹介の記事を承けた絵解の内容が、本文での人物の年齢と異なっているのは、新構想による記事の挿入での年月の推移を、本文には手を加えずに絵解を操作することで物語の断層を埋めようと試みた形跡であると見ることができる。それが影響して絵解の構成をも乱すようなこととなった。更に、それとは別に、新たな人物紹介が本文でなされた際にそれを承けて絵解にも書き加えている。

このように考えてくると、絵解は、本文の成立とは別に書かれたものではなく、本文と平行するような形で作者によって書かれたものと推定される。そうだとすれば、絵解の形態が物語本文の成立の過程を反映しているということは十分考えられる。物語本文の展開に即していない、一見混乱しているかのような絵解の順序は、かえってそれが本文の成立順序を示すことともなっている。

### 三

第三章は、「菊の宴」の成立の一端を、物語の当初より登場し、貴宮入内後妻子をも捨てて隠棲するにいたる源宰相実忠の描写に焦点をあてて考察する。

「菊の宴」における実忠の描写には二つの系列が認められ、それらは結合されようと意図されながら、結局は融合できずに分裂した世界を構成している。一つは貴宮に対する激しい恋情を表現した物語であり、他は、一家離散の運命に遭遇した北の方と二人の子の織りなす世界である。妻帯者実忠の恋は、貴宮の兄仲澄の恋・主人公仲忠の求婚等とともに、作者は相当の力点を置いて描いていた。貴宮の入内によって妻帯者実忠の特性をクローズアップしたのが「菊の宴」での一家離散物語であった。このような流れの中でとらえると、二系列の物語は自然な展開として描かれるべきものであるが、両者の間には大きな断層が認められる。一方が叙事性の勝った文章だとすれば他方は叙情性の強い表現によって描かれている。しかも、これをことさらに結びつけようと意図した形跡が内容上の矛盾、表現の不整合となって現れている。このような現象は、実忠の一家離散物語を別に書いた後で、恋に狂う実忠を描いた部分に組み入れようとして「菊の宴」を構成しようとしたところに生じたものとの推定を可能にさせる。恋に狂う単純な描写では読者層を十分に満たすことはできないと判断した作者が、一家離散という現実的問題を主題にからませたところに「菊の宴」の実忠物語の特性は認められる。

### 四

この物語を読みづらくさせていることの一つに本文上の問題があることについては前に述べた。その一つに重複文がある。第四章はこの点について考察した。その主たる部分は「内侍のかみ」と「沖つ白波」との間に認められる正頼夫婦の婿選びの相談の条であるが、それとともに、「沖つ白波」冒頭の一段も、更には、孤立文と称され前後の本文から浮いた存在となっている部分も、それぞれ「内侍のかみ」の中に対応する部分が認められる。

この両巻の重複文を比較してみると、「沖つ白波」の方がより簡略化された表現がなされ、文脈の上からも「内侍のかみ」の文の方が必然性を持っている。そのことを証するものとして、清水浜臣が指摘した「内侍のかみ」の錯簡の問題がある。この錯簡は綴じ誤りによってもたらされたものではなく、作者の意図的な操作による。それを証拠づけるのが、「7月1日」の条の中に、「7月10日ばかり」の一句が挿入されていることである。これによって組み替えによって起る日時経過の不自然さを粉飾しようと試みたのである。このような操作をしてまで、重複文による表現をあえてしなければならなかったのは、執筆中における構想の変更であったと考えられる。

第五章では、第四章で触れた孤立文の内容と成立について考える。それを孤立文(A)としたのは、同巻の他の部分にも孤立文があり、それと区別するためである。「内侍のかみ」の孤立文(A)が、「沖つ白波」の冒頭の一段を粉飾転記したものであることは第四章で述べたが、その際、(A)

の冒頭文「まかなひにもわたらせ給へりき」の意味の把握ができていなかった。本章においては、この「まかなひ」の意味を明らかにすると同時に、それが巻の成立に関係するものであることを述べる。

「内侍のかみ」の(A)と「沖つ白波」冒頭の一段とが重複しており、その「沖つ白波」と「あて宮」の絵解の一文との間にも共通した表現・場面が見られるところから、「あて宮」のこの部分と「内侍のかみ」の孤立文との間にも何らかの照応関係があると推定される。この「あて宮」の絵解に続いて、本文中に盛大な「まかなひ」の描写が位置している。貴宮の里である正頼方で準備がなされたこの「まかなひ」こそ、「内侍のかみ」の孤立文中に出てくる「まかなひ」と結びつくものと考えたい。「内侍のかみ」・「沖つ白波」・「あて宮」というこの三巻の間に認められる表現の共通性から、三者を同一構想圏にあるものと考え、そこから意味不明となっている「内侍のかみ」の孤立文の意味を解明する。これが、証明されることによって、「あて宮」の「まかなひ」の描写に続く巻末部分の成立も明らかとなってくる。

第六章では、「内侍のかみ」の、前章で論じた部分とは他のところに見られる孤立文について考察する。これを孤立文(B)と仮称する。

この孤立文(B)と関係があるのではないかと思われる表現が同じ「内侍のかみ」に見られる。それは、両方共に兼雅と仲忠との会話文である。そこでは、「まいられよ」「まいらぬ」ということが二人の話題の中心となっている。更には、仲忠が「まいらぬ」と言っている理由が「みだり心ち」の「なやましく」という点で共通している。以上のような点から、孤立文(B)と兼雅と仲忠との会話文との関係を探っていくと、(B)は、現在存している位置にあったものではなく、文脈上相撲の節会の当日、兼雅と仲忠とが藤壺で言葉を交わしている部分にあったのではないかと思われる。ただ、両者は同一部分に存すべきものではありながら、異なった成立の経緯を経ているのではないかと思われる。

「内侍のかみ」が「初秋」・「とばかりの月」などの異なった巻名を持っていることから、この巻の成立の事情の複雑さを示していると見ることはできるのではなからうか。そうすると、現在のような形に成立する以前の草稿のようなものがあって、その一部が相撲の節会の準備の条に錯入したものではなからうかとの推定もできる。

第七章においては「内侍のかみ」における絵解文と物語本文との関係について考える。絵解と物語本文とが成立上密接な関係を持っていることについてはすでに第二章において論じたが、本章においては「内侍のかみ」に見られる四箇所絵解について考える。その中に、物語本文の記事と絵解の記事とが前後逆になっていたり、絵解の内容に応ずる本文の記事が存しない部分が見られる。このような現象は、「内侍のかみ」の成立の問題と深くかかわっていて、「内侍のかみ」の本来冒頭部分を構成していた「7月1日」の段を、次の巻の「沖つ白波」を執筆するに当たって、「六月ばかり」のある日のこととして粉飾転記し、その後で、「内侍のかみ」の巻を分断して、冒頭の「7月1日」の段を中間に挟み込むような措置をとった。このような操作が絵解に関係して、本来密接

な関係をもって記されていた絵解文と本文との関係を壊してしまったと考えられる。

更には、これまで絵解と考えられてきて説明できなかった部分を、絵解ではなくて物語本文と考えることで無理なく理解できる部分もある。しかし、これらの矛盾が「内侍のかみ」の内蔵する複雑な成立過程と密接に絡みあって生じていることだけに、表面的な整合を求めていくのみでは解決のつかぬ場合もある。重複文の片方を削除する意図をもって転記しながら、削除されぬまま流布したと推定できる部分も認められるのである。「内侍のかみ」の絵解の問題は、そのままこの巻の抱える成立の問題と結びつくのである。

## 五

第二部の構造論では物語世界がどのように形象化されているか、首巻「俊蔭」から終巻「楼の上」で完結する流れの中で把握してみたい。

第一章は起筆「藤原の君」に始まる貴宮求婚物語の中に、すでにヒロイン貴宮の悲劇的な運命が予示されているとしてその展開を跡づける。東宮への入内が政治的な野望の実現のための布石であることを「嵯峨院」で述べるとともに、政治とは対極に位置する芸道への道を歩む主人公仲忠を首巻「俊蔭」で設定し、この仲忠と貴宮との歩む人生を対比させることで物語の新しい展開を図っている。こうして求婚と芸道と政治とがそれぞれに接点を持つべく構想されながらも、主題としては分裂したまま物語は進行していく。美女とそれを囲む男達の物語はそれだけで一つの世界を創造しながら、女主人公の入内という形で、その延長線上に政治の影を予想するのは自然な流れであった。この意味で、作者の原初的な構想では貴宮という女主人公の入内後の悲劇的な運命の展開を意図したものであったと言える。そこに第二次的構想として仲忠を設定した。秘琴の伝授者仲忠への憧れを描くことで、貴宮の悲劇性はより強く表現される構造を持つこととなった。この物語は、首巻として位置づけられている巻が主人公仲忠の登場を記す「俊蔭」であり、それを承けて終巻「楼の上」が位置している為にややもすれば芸道の伝授物語として解釈されているようであるが、作者が、起筆当初に抱いた基本構想は、貴宮の運命実現の物語であったと解釈する。

## 六

第二章・三章では「内侍のかみ」をとりあげ、そこに創造された物語世界の一面を通して作者が意図するところに迫ってみたい。

第二章はこの巻の特徴となっている物語的世界の面白さを考える。稲賀敬二氏は、平安時代の文学の享受の方法として「クイズ的な享受」の方法があったことを説いておられる。それは、古今集をはじめとする文学の知識を前提とした遊戯であり、それがまた、作者と読者とをつなぐ役割を果たすものであった。

「内侍のかみ」は他の巻に比して遊びの雰囲気随所に漂っている巻であるが、その中でも仲忠と貴宮の侍女兵衛の君とが交わす会話はクイズ的な面白さを意図的に構成した場面となっている。引

歌を駆使した両者の会話は一つ一つが謎のかけ合いとなっている。その典拠を求めそれによって謎を解説していくことがこの場面における読者の態度として要求されているのである。「つれづれを慰め」る物語はまさに面白いものでなければならなかった。これこそ「内侍のかみ」の物語的世界の基底をなすものであった。

この「クイズ」的性格が一層強く物語的世界に組み込まれているのが第三章で考察する帝の宣旨をめぐる謎と題した内容である。「内侍のかみ」が研究上いろいろな課題を抱え持つ巻であることについてはこれまでも触れてきたが、その中でも帝の宣旨に関しての「内侍のかみ」の記事には大きな矛盾があって解決を困難にしてきた。それは「吹上（下）」での帝の宣旨が、この巻の中だけで混乱しているかのような形で記されているのである。「吹上（下）」で仲忠と源涼とが琴の弾きくらべをした際、帝が宣旨として、仲忠には「一の内親王」を、涼には「あてこそ」と記してあったものが、「内侍のかみ」では、「貴宮は仲忠」と宣旨を下したと記されていたり、「涼にはさま宮を」となっていたり、更には「さま宮を仲忠に」と帝が女御に勧めながら、さま宮の親は「さま宮を仲忠に」と願いつつも、仲忠については、帝が他に相手を考えておられるからということで諦めている。結局、仲忠は宣旨のとおり一の内親王と結ばれることとなるが、それにしても、この巻の中だけでの二転、三転する宣旨の内容については理解を阻むものがある。

これまでの研究では、作者別人説、作者の記憶違い、成立過程上の問題といろいろな方法が試みられたが、納得のいく解釈はなかった。

ここでは、この問題を「クイズ的享受法」の一つとして、作者は「そらごと」の論理で構成しようとしたのではないかと推測する。すなわち、「吹上（下）」において貴宮の父正頼に下した「貴宮を涼に」という宣旨が、貴宮の入内によって実現されなかったことに対する報復として、帝は正頼を「そらごと」で以てからかってやろうと思われた。そこで彼等夫婦が「さまこそを仲忠に」と望んでいることを見越して、彼等の娘である仁寿殿女御に「さま宮を仲忠に」と誘いをかけていく。この誘いの言葉を言うために「貴宮を仲忠に」という宣旨が実現されなかった代りとしてという形が必要とされたのである。

このような謎ときの楽しみを主題に据えて構成された巻が「内侍のかみ」である。この巻の成立上の問題点と、帝の宣旨をめぐる問題とは別の次元のものとしてとり扱わねばならぬ性質のものである。

## 七

第四章はこの物語後半部の序章とも言うべき「蔵開」の構造について考察する。「藤原の君」に発し「沖つ白波」までの世界が貴宮求婚物語を要として展開してきた中で、首巻「俊蔭」によって登場した主人公仲忠の物語世界における主人公としての復権を意図した巻がこの「蔵開」である。仲忠のクローズアップは「内侍のかみ」あたりから徐々に意図されていたが、祖父俊蔭が遺した文蔵を開くことを意味するこの「蔵開」において、隠遁者俊蔭とは異なって、霊琴の伝授者として芸

道の道を生きるべく運命づけられながら、貴族社会の中で豊かな人間性を具備して生きる理想的な人格者としての仲忠像を形成していく。一方、帝の娘一の宮を妻とする幸せな仲忠像と対比して、東宮妃として入内した貴宮のままならぬ境遇を描き出す。このような物語の方向は、入内そのものが女の幸せ、一族の幸せにつながるという平安時代一般の貴族的思想の否定につながるものであった。権力や地位は、ここでは人間の幸福の規準とはならなかった。このことは同時に、やがて来るべき東宮立坊をめぐる政治的抗争を主題とする「国譲」へ向けての構想を暗示するものでもあった。一方、仲忠の芸術的才能に加えて、父兼雅が見捨てた妻妾達への仲忠母子の暖かな待遇は、貴族社会における新しい理想的人間像の誕生を意味していた。これこそ政治的貴族社会からの脱皮を願望する作者の理念が創造したものであった。

## 八

第五章は「国譲」の中心主題である立坊政争物語の構造を分析する。

貴宮求婚物語の展開として、貴宮入内後の物語の方向が、東宮の地位をめぐる政治的抗争の場へと向かうのは自然な流れであった。貴宮腹皇子の背後には源氏正頼の一族があり、一方藤氏側は梨壺腹皇子の立坊に賭けていた。有能な政治家正頼家に生まれた貴宮の運命には当初よりかかる状況は予約されていたのである。一方、藤原氏の中心人物は兼雅であるが、物語中においては色好みとして設定され政治的力量はなく、また、理想的人格を具備するものとしての仲忠は醜い抗争に巻き込まれる人物であってはならなかった。ここに悪役として設定されたのが藤氏出身の中宮であった。この中宮が政治的策謀の要となったのは、源氏出身の仁寿殿女御に対する嫉妬からであった。中宮の嫉妬心はその掲げる「大いなること」という大義名分に覆われて当初こそは表には出ていないが、その策謀が陰湿な方法を伴い、人々の間にいたずらに混乱を巻き起こすだけのものとなっていく時、その醜さは露わになっていくのである。この抗争を調停したのは帝の中庸の徳であった。立坊問題は帝の英断により貴宮腹若宮の立坊となって決着はついたが正頼・貴宮は苦悩の淵に沈まねばならなかった。政治的欲望の実現のためには、腐敗した倫理の醜さと苦悩という代償を支払わねばならなかったのである。この政治的混乱を回避した仲忠こそ新しい倫理の体現者として構想されていくのである。

第六章は、「国譲」の中心主題である立坊問題の間を縫うように構成されている源宰相実忠物語について考察する。この実忠物語の展開については、すでに第一部第三章において論じたところであるが、この巻で作者はこの物語の終息を図っている。貴宮への激しい恋のために一家離散の悲惨な境遇に陥った実忠一家の運命の展開を、政争物語の間を縫うような形で描きあげたのである。貴宮への常軌を逸した恋が劇的な叙事的主題であるとするならば、他方は歌物語的な叙情的色彩を伴っている。この二系列の物語の重層性を解くことがこの巻の性格の一端を明らかにすることにつながるのである。

実忠物語の発端は父季明の死に始まる。臨終の床にある季明にとって気がかりなのは隠棲した実

忠とその家族のことであった。一方太政大臣季明の死は、源藤両家の政治的均衡を破る。しかし、正頼は季明によって託された実忠の官界への復帰を自らの政治的野望とは結びつけていない。季明との約束を守る律義な人間として描かれていく。一方、貴宮も実忠が世捨て人となったことについては責任を感じていて庇護の手をさしのべる。実忠が再び妻子と会い穏やかな家庭生活を営むようになり得たのは多くの人の善意が結集したからのことであった。実忠物語を流れる精神は、貴族的倫理の体現者仲忠像を側面から支える役割を果たしているのであった。この実忠物語と政治的抗争の物語とは一つの接点を持ちつつも両者が絡みあう物語的世界は構築されてはいない。ここに作者の方法上における限界を見ることができるのである。

## 九

第七章で終巻「楼の上」の構造について論じる。右大臣兼雅の妻妾の一人宰相の君の「楼の上」冒頭の段の一首「渡り河」の歌は、定めなき流転の人生を送る薄幸な女の哀しみをうたったものであった。それは、俊蔭女の若き日の苦しみ多き生活を描いた首巻「俊蔭」へと回帰する「楼の上」のモチーフを奏でる序奏の役割を果たしている。

父俊蔭より琴の秘伝を継承した俊蔭女は、平和な生活の中で老いを感じ、来世を思い、病がちの身となっていた。これらの条件は秘琴伝授の問題と必然的に結びつく。仲忠は一子犬宮への秘琴の伝授を「一生の大きな大事」として公務を退いて心を傾ける。伝授の場として俊蔭以来の京極邸の修復を企てた。物語は、この新京極邸の造営を、構想の段階における概観から、建造中における内部の仕様、そして、完成した外観の壮麗さと、三段階の律動的な文体で綴っていく。造営なった新京極邸を目にしつつ、俊蔭女・兼雅の懐旧の情がしみじみと語られる。かくして、新京極邸は古を今につなぐ伝統の礎の上に位置づけられたのである。

犬宮に伝授する秘琴の奥義を、仲忠は四季の推移との関連の中で説いている。「時にしたがひつつ色衰へ」る自然の中に「人の心」を見てそれを琴は表現する。琴はただ単に音色の美しさを競うものではなかった。自然の推移と人の心とが一つになる時、琴の音色はそれを奏でるものとなった。冒頭の宰相の君の「渡り河」の中に詠み込まれた流転の人生は、ここにおいて、仲忠の琴の理論とも密接に結びつくものであったのである。

犬宮修行の一年が始まる。ここに描かれるのは、四季折々の自然と琴との交響楽の世界である。楼を包む桜、そしてやがて雨の季節へと移り、風に吹かれる楼、香り高い風が吹き抜けていく。季節が織りなす自然の美の中で、俊蔭女より犬宮へと秘琴は伝承されたのである。八月十五日の月明の夜、俊蔭女の霊琴波斯風は貴頭の前で奇瑞を現した。犬宮がひそかに奏でる竜角は天変地異の瑞祥はなかったが、そこには、仲忠が説いた自然と人の心とが一体となった調和した新しい美的世界を出現せしめていた。天人から伝えられた霊妙な琴は、今ここに、人の心の琴として定位されたのである。



## 論文審査結果の要旨

本論文は、『宇津保物語』の成立過程、物語的構造及び主題を、実証的・総合的に究明することを目的としたものである。もともと『宇津保物語』は、全二十巻から成る長篇で、平安朝初期物語を代表する作品として、『枕草子』や『源氏物語』にもその内容が紹介されるほどに流布していたにもかかわらず、巻序の混乱や本文の錯簡・竄入・重複などによって読解作業が阻まれ、研究のうゑに、著しい立ち後れを来して現在に及んでいる事実は覆うべくもない。論者が、そのような受容史を慎重に視野に入れたうゑで、「第一部 成立過程論」において、主な巻々についての文献学的本文批判を試み、適正な本文の整定を行って作品の成立過程を明らかにし、その成果を踏まえつつ「第二部 構造論」をとおして、求婚・政争・芸道の三つのモチーフの織り成す物語世界の構造と主題の解明へと歩みを進めているのは、そのために外ならない。

「序章『宇津保物語』の方法と研究」において、まず、作者の理念を宿した多様な個性的人物像の造型と設定をとおして主題の展開を図る点に、本物語の方法上の第一の特色があることを指摘する。次いで、求婚・政争・芸道の三つのモチーフが、必ずしも有機的に関連するものとしてではなく、同時並行的・羅列的に進行する点に第二の特色を見だし、更に、個々の独立的短篇の集積による長篇化と、その間を縫い取って行くモチーフの持続性に第三の特色を求めうる、とする。そうした物語の方法が、本作品の成立過程を複雑化し、ひいては、物語的構造に整合性の欠如をもたらすこととなった、とも説く。続いて、本物語の研究史を巨視的に概観し、近世後期の細井貞雄らの諸本研究、本文批判的研究に触れつつ、錯雑に纏れた本文の糸をほどき、成立過程と物語的構造の相関を照射するための方法として、文献学的内部徴証と文芸学的解釈の必要性を強調する。ここに示された対象の把握と方法の設定は、妥当な見解であると言えるだろう。

「第一部 成立過程論」の「第一章 「藤原の君」巻末の文の成立」では、「藤原の君」の巻末の記述の矛盾が、本来、一連の物語を構成する部分だったはずの文章が、分断されて現行形態に定着することによって生じたものであるとして、本文の乱れを整定したうゑで、求婚物語の中に異質な登場人物を導入しようと意図した作者の構想に起因するものであることを論証する。平安朝初期物語が、首尾一貫した構想に基づく整然とした本文形態を伴っているのではなく、削除・添加等の曲折による痕跡を残して成立したものである、とする見解は、傾聴に値する。

「第二章 「藤原の君」における絵解と本文との関係」では、「藤原の君」の巻の絵解と、物語本文との間の順序のずれが、新たな構想による記事の挿入を、絵解の操作によって代替した結果生じたものである、として、相互が並行して書かれた文章であることを解明する。絵解の順序が、かえって物語本文の成立過程を示唆する、との指摘は、本文と絵解の関係についての従来諸説のうち、児玉房子・笹淵友一の推論を、本文批判の立場から実証的に補強するものとして注目されよう。

「第三章 「菊の宴」における実忠物語の成立」では、物語の当初から登場し、貴宮入内後、妻

子をも捨てて隠棲するに至る源宰相実忠の人物描写に焦点を絞り、「菊の宴」の巻にみられる貴宮に寄せる恋情と一家離散の悲劇との二系列の実忠描写を精緻に分析、内容上の矛盾、表現上の不整合が、実は、読者の期待を予想して書かれた後者の現実的モチーフを、前者の系列の物語に組み入れることによって生じたものである、と述べている。本文批判の作業に、人物像の造型方法の視点を導入した点に新見が認められる。

「第四章 「内侍のかみ」「沖つ白波」両巻における重複本文の成立」では、この両巻にみられる重複本文の対比的考察をとおして、それが、執筆途中の構想の変更によるもので、作者の意図的な操作に原因するものであることを立証する。本文の綴じ誤りによる錯簡として、書誌的視点から処理されて来た清水浜臣以来の所説を退け、作品の成立過程の一環として捉え直す論者の主張は、十分に説得力を持つものと考えられる。

「第五章 「内侍のかみ」における孤立文（A）の成立」及び「第六章 「内侍のかみ」における孤立文（B）の成立」では、ともに、前後の本文との間に関連性の認め難い孤立本文に、巻の構想や成立事情と直接関係する場合や、草稿の錯入によるものなど、様々な事例が存在することを具体的に検証し、いずれも作品の成立過程に密接にかかわるものである、とする新見を提示している。

「第七章 「内侍のかみ」における絵解と物語本文との関係」では、本作品がかかえる文章上、構成上のすべての矛盾や不整合性が集中的に顕在する「内侍のかみ」の巻の物語本文と絵解の位置の逆転現象などに触れつつ、あるべき本文整定を試みる一方、作品の成立過程との関係についても言及し、文献学的本文批評が、やがて文芸学的作品解釈へ通じる回路を示すものであることを指示する。後半、第二部の方法や論旨への架橋を、おのずと試みる行論であることは、否定すべくもない。

「第二部 構造論」の「第一章 基本構想」においては、執筆当初の本物語の基本的構想が、貴宮を女主人公とする求婚物語と、入内によって政争を巻き込むその悲劇的な運命の末路を語るものであったことを丹念に論証し、次いで、第二次的構想として秘琴の伝授者仲忠をめぐる芸道物語が設定され、やがて、求愛・政争・芸道の三つのモチーフが並立的に進行する物語的世界が形成されることになったものである、と説く。したがって、仲忠系の芸道物語に主題を探る従来の通説とは異なり、貴宮系の求婚物語の運命を辿るところに、基本的構想に基づく主題を求めることができる、とも述べる。独自の構造論による論者の主題把握として、聴くべきところが多い。

「第二章 「内侍のかみ」の構造」及び「第三章 「内侍のかみ」における帝の宣旨をめぐる謎」では、先行文芸を念頭に置く引歌・引詩・本歌取り・本説・本文・物語取りなど、いわゆる引用の文芸としての観点から、会話文などに含まれる謎の空白の部分埋める必要があることを強調する。そして、論者は、稲賀敬二の提案に倣って、作者・登場人物・享受者（読者）の三者を結ぶ「クイズの享受法」を援用することにより、物語的構造の一側面を照射し、プロットの進展のずれや本文の乱れの原因を究明して、新たな視界を開いている。

「第四章 「蔵開」の構造」では、非現実的世界の側面を際立たせることによって「俊蔭」の巻からの系譜を再確認する「蔵開」の巻の構想が、現実的求婚物語の中に埋没しかけた仲忠を、再び

浪漫的な芸道物語の世界に呼び戻し、一方では、貴宮の幸運な生き方に疑義を呈しつつ、平安朝貴族の理想像の崩壊の予告を企図したのものである、と述べる。そうした構想の基底に、政治的構想のモチーフを導入する点に、作者の物語制作への新たな志向を読みとることが可能である、とも指摘する。すべて、見過ごし難い見解である。

「第五章 「国譲」の構造」では、貴宮入内後の立坊をめぐる政争物語が主導するに至る事情を説明し、上流貴顕の世界に鋭い批判の矢を射る作者の制作方法に注目している。石母田正の提言に賛意を表しつつ、それを物語の構造の分析をとおして補強するとともに、理想性と現実性が交錯し、やがて理想が現実裏切られて行く初期物語の世界に、人間の善意による調整操作を看取る論者の視点は、見落とし難い。

「第六章 「国譲」における実忠物語の構造」では、実忠の再登場の物語の終息を告げるこの巻を分析して、貴宮への恋情を叙する劇的・叙事的モチーフと、一家離散に伴う歌物語的・抒情的モチーフの織り成す二系列の物語の重層性が、結局は相互に絡み合うことなく終焉する点に、初期物語の方法上の限界がある、と説く。ここでも、様々な人びとの善意によって、悲劇の人となることを回避し得た実忠像の復権に、論者は強い関心を寄せ、貴族社会の倫理の理想を読みとっている。

「第七章 「楼の上」の構造」では、本物語の最終巻として位置づけられているこの巻が、首巻「俊蔭」の巻へと照応・回帰する構造を示している点に触れ、四季の移ろい、人の心、秘琴の音色の三者が一体となって現出する調和的美の世界の物語的達成である、とも述べている。こうした大団円の構想は、すでに「蔵開」の巻に淵源する、ともいう。「藤原の君」に筆を起こした作者が、「俊蔭」を首巻と定めて構想し、展開させてきた長篇物語が、様々な挿話的短篇を包み込みながらも、「楼の上」の巻に澄明な美をたたえた物語的世界を完結した、とする論者の指摘は、おおむね妥当な見解であると言えよう。

以上のように、本論文は、『宇津保物語』の成立過程、物語的構造及び主題を、論者独自の本文批判と作品解釈の方法によって、多角的・総合的・実証的に究明したものである。論点は多岐にわたりながらも、すべて最終章に収斂すべく有効に機能しており、慎重な本文批判と作品解釈の方法による分析は、周到・緻密な論述とあいまって、論旨に十分な説得力を与えるものとなっている。全二十巻のすべての巻々を網羅して立論しているわけではないが、問題とされる主要な巻々を対象として、本物語の成立過程と構造・主題の考察に、一定の法則性を提供している点は、高く評価されるべきであろう。しかしながら、「第一部 成立過程論」と「第二部 構造論」の論旨が、必ずしも十全に関連し合っていない点、『宇津保物語』以外の初期物語への言及が少ないこと、絵解の把握にやや疑義が残る点など、今後の検討をまちたいところも少なくはない。

総じて、本論文は、先行の研究成果を批判的に踏まえ、しかも独創的な着想と綿密・周到な論証によって、『宇津保物語』研究史上に未踏の分野を切り開き、斯学の水準を高めたものであることは、疑いを入れないところである。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。